

食品リスク態度と購買行動に関する調査研究 (1) —大学生とその母親を対象とした基礎的分析—

鎌田 晶子*・下村 英雄**・堀 洋元***

Research on Risk Attitude to Food and Purchasing Behavior (1): Basic Analysis of University Students and Their Mothers

Kamada Akiko, Shimomura Hideo, Hori Hiromoto

[Abstract] Attitude and judgment about risks will affect consumers' food-purchasing behavior. In this study we gave a definition of "risk attitude" as cognition, feeling, and behavior about risks. The university students' ($n = 325$) and their mothers' ($n = 138$) risk attitudes toward some incidents/accidents, reported by mass-communication in the past several years, were examined comparatively. We further examined the relations among their attitudes toward incidents/accidents and food risks and their food-purchasing behavior. The results showed that compared to the university students, the mothers showed a strong tendency to be "safety oriented" in terms of risk attitude in regards to food incidents/accidents and food-purchasing behavior. The merits and demerits of escalated risk perception are discussed.

1. はじめに

近年、食の安全や食品に関するリスクが盛んに議論されるようになってきている。2003年には食品安全基本法が制定され、食品安全に対する積極的なリスク分析・管理がなされるなど行政の対応にも変化が認められている。いうまでもなく、食は日々の生活に欠かすことのできない事柄であり、すべての人々にとって身近なものである。食品に関するリスクの判断は、消費者に必要不可欠な食品の購買行動にも影響を与えるであろう。

人やものに対して害を及ぼす可能性のある現象や事柄の特質に対して、人々がどのように評価・認識しているのかを、リスク認知 (risk perception) という。リスクに対して、不安や懸念のような感情が喚起される場合もあるだろうし、リスクの認知や感情がなんらかの行動につながることもあるだろう。本研究では、そのようなリスクに関する認知・感情・行動を含めてリスク態度 (risk attitude) と呼ぶこととする。その中でも特に、食品のリスクに関するものを、食品リスク態度と呼ぶこととする。

* かまだ あきこ 文教大学人間科学部

** しもむら ひでお 独立行政法人 労働政策研究・研修機構

*** ほり ひろもと 独立行政法人 科学技術振興機構 社会技術研究システム

一般にわれわれは、どのような食品が危険なのか、どの程度危険なのか、どのような対策が必要なのかなど、食品リスクに関する情報のほとんどをマスコミ報道によって得ている。岡本(1992)は、われわれのリスク判断が逐次的なリスク報道に影響され、実際の頻度よりも報道の頻度の影響を強く受けていることを指摘している。食品に関する社会的な事件や事故の報道が、われわれの食品リスクに対する態度に与える影響も決して少なくはない。最近では風評による被害の甚大さも指摘されるようになり(堀, 2003)、報道による情報を取得するだけでなく、情報を選別・吟味し正しく判断する必要が求められるようになってきている。

本研究では、ここ数年の間にマスコミで報道された事件・事故を取り上げ、それらに対して人々がどのようなリスク態度を形成しているのか、また、それらの態度が食品購買行動や食品に対するリスク態度とどのような関連を示しているのかを検討することを目的とする。さらには、食品リスク態度において、一家の食卓を預かる母親は、大学生に比べて食品リスクに対する関心が高く、より食の安全に考慮した行動をとる可能性が高いと考えられるため、大学生と大学生の母親のリスク態度を比較しその相違について基礎的な分析を行うことを目的とする。

2. 食品リスクに関連する事件・事故

本研究では、食品リスクに関連した過去の事件・事故として、JCO事故、雪印事件、BSE問題、鳥インフルエンザを取り上げ、それぞれの事件・事故に対するリスク態度を測定した。これら4件の事件・事故の概略を以下に説明する。

2.1 JCO事故

1999年9月30日、茨城県東海村にある株式会社ジェー・シー・オー(JCO)のウラン加工工場で国内初の臨界事故が発生した。この事故で3人の作業員が重度の被曝をし、うち2名が亡くなった。発生から20時間たって臨界は終息したが、現場から半径350 m圏内の住民に対して避難要請が行われるとともに、半径10km圏内の住民には屋内待避要請がとられるなど約31万人に影響が出た。周辺の農作物等の安全性には実際的な問題がなかったといわれているが、風評により干しイモや茨城産の野菜の買い控えが生じるなど、その経済的影響は農業・漁業・観光に及んで大きな被害が出た。

2.2 雪印事件

2000年6月、雪印乳業の低脂肪乳を飲んだ消費者が食中毒症状を訴えたことに端を発し、最終的に約1万5000人が中毒症状を示した。原因は大阪工場で製造された低脂肪乳の原料の脱脂粉乳を生産していた北海道の大樹工場、停電によって黄色ブドウ球菌が増殖して毒素が発生したためだった。この事故によって大阪工場での衛生管理体制のずさんさが明らかになった。さらにその後、2002年1月に、BSE対策として政府が行った牛肉買い取り制度をめぐって、雪印食品が輸入牛を国産牛と偽り助成金を詐取した。度重なる雪印グループの不祥事によりブランドイメージが急激に低下し、グループの解体・再編を余儀なくされる結果となった。

2.3 BSE問題

2001年9月、日本で初めてBSE(牛海綿状脳症:狂牛病)による感染牛が確認された。この感

染牛は焼却処分されたという発表にもかかわらず、実際は肉骨粉の原料に回されていたことが判明し、監督官庁である農林水産省の責任が追及された。また、雪印食品による牛肉の産地偽装表示が明らかになったことが引き金となり、牛肉を扱う食品・飲食業や外食産業などに対する消費者離れが起きた。さらに、2003年12月にアメリカでBSE感染牛が発見されると、米国産牛肉と牛肉加工品、生体牛の輸入を一時的に取りやめる措置をとったため混乱に拍車がかかった。

2.4 鳥インフルエンザ

鳥類が感染するインフルエンザのことで、中でも死亡率が高いものが高病原性鳥インフルエンザと呼ばれる。人に対する感染率は極めて低いですが、香港や韓国などのアジア各地では死者も出ている。日本では1925年以来、感染が確認されていなかったが、2004年1月から2月にかけて山口、大分の養鶏場で感染が確認された。その後、京都の養鶏場「浅田農産」では、鳥インフルエンザが原因で鶏が大量死していたにもかかわらず行政への通報を怠り出荷を続けたため、消費者や流通関係者への不信を招いた。

3. 方法

3.1 調査実施期間

2004年（平成16年）12月に実施した。

3.2 調査対象者

首都圏の大学（B大学 M大学 N大学）に通う大学生および大学生の母親に対して調査票への回答を依頼した。調査票の配布数は600であり、回収数は472であった（回収率79%）。回収された調査票のうち、回答に大幅な欠損のない468名を調査対象とした。調査対象者は、男性98名、女性366名、不明4名であり、平均年齢は28.0歳（SD：13.53歳、範囲：18歳から60歳）であった。そのうち、大学生が325名（男性98名：女性227名：平均年齢19.35歳）、大学生の母親が138名（平均年齢49.14歳）、不明が5名であった。大学生の母親の職業は、正社員15名、自営業11名、契約社員2名、パート・アルバイト59名、専業主婦45名、その他6名であった。

3.3 調査手続き

大学での講義終了後に大学生に調査票を配布し回答を依頼した。また、大学生で母親と同居している者には、学生を通じて母親に調査票への回答を依頼した。

3.4 調査票

調査票は、9つの設問と属性に関する項目から成り立っていた。本研究では、調査尺度のうち「事故・事件に対するリスク態度尺度」、「食品購買行動尺度」、「食品リスク態度尺度」、「場面想定下における食品価格評定尺度」を分析対象とした。

「事故・事件に対するリスク態度尺度」は、JCO事故、雪印事件、BSE問題、鳥インフルエンザに関するリスク態度を尋ねるもので、それぞれ5項目で構成された。それぞれの項目が自分自身にどの程度あてはまるかを「まったくあてはまらない (1)」から「非常にあてはまる (5)」までの5段階評定で回答を求めた。

「食品購買行動尺度」は、個人の日常的な購買行動を測定するもので、11項目で構成された。それぞれの項目が自分自身にどの程度あてはまるかを「まったくあてはまらない (1)」から「非常にあてはまる (5)」までの5段階評定で回答を求めた。

「食品リスク態度尺度」は、普段の買い物をするときなどの食品に対するリスク態度を測定するもので、7項目から構成された。それぞれの項目が自分自身にどの程度あてはまるかを「まったくあてはまらない (1)」から「非常にあてはまる (5)」までの5段階評定で回答を求めた。

「場面想定下における食品価格評定尺度」は、外国産の食肉についてBSEおよび鳥インフルエンザが生じた場面を想定し、その際に国産および外国産の食肉に対する価格評定を求めるものであった。具体的には、BSEや鳥インフルエンザが発生したとの報道がなされた場面において、いくつかの食品名と価格を挙げて、報道以降にそれらの食品の値段がいくらなら購入するかと尋ねるものであった。購入しないもしくは購入したくないという場合には、0円と記入するよう求めた。特に、BSE問題については、大学生にもなじみの深いものとして、ハンバーガーや焼肉の価格を尋ねた。呈示する価格は、現在の市場における価格設定を参考にした。

4. 結果と考察

4.1 事件・事故に対するリスク態度

JCO事故、雪印事件、BSE問題、鳥インフルエンザに関する回答頻度をそれぞれFig.1からFig.4に示した。全般的な傾向として、事件・事故からの時間経過が長ければ長いほど、認知、感情、行動ともに得点が低い傾向が顕著であった。たとえば、1999年（調査時点から約5年前）に起こったJCO事故に関しては、すべての項目で「まったくあてはまらない」が50%前後を占めるのに対して、2004年（調査時点から約1年前）の鳥インフルエンザに対しては、「まったくあて

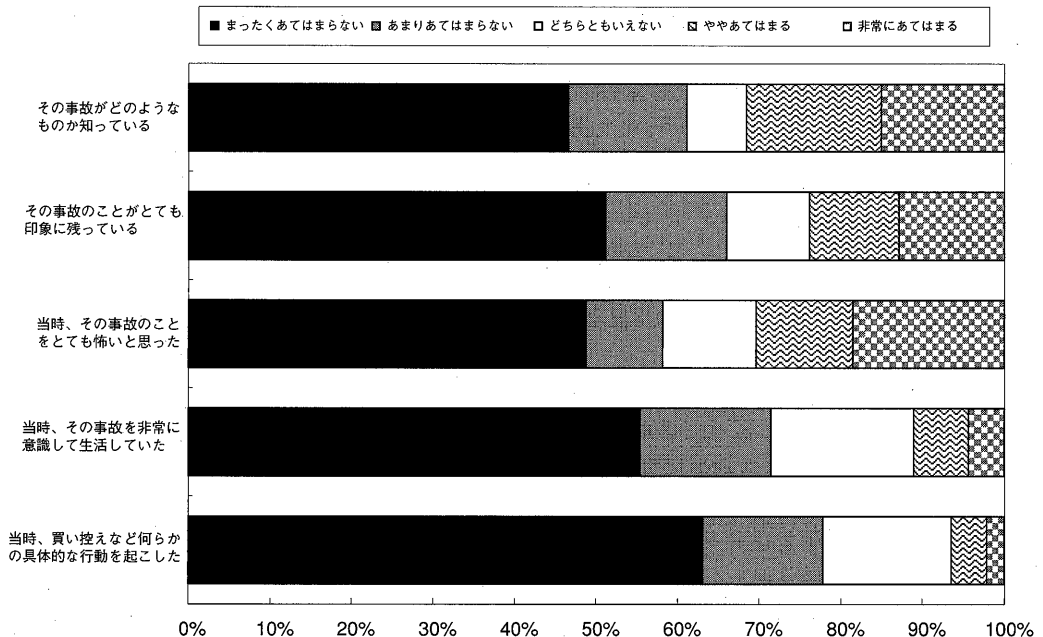


Fig. 1 JCO事故に関するリスク態度 (n=468)

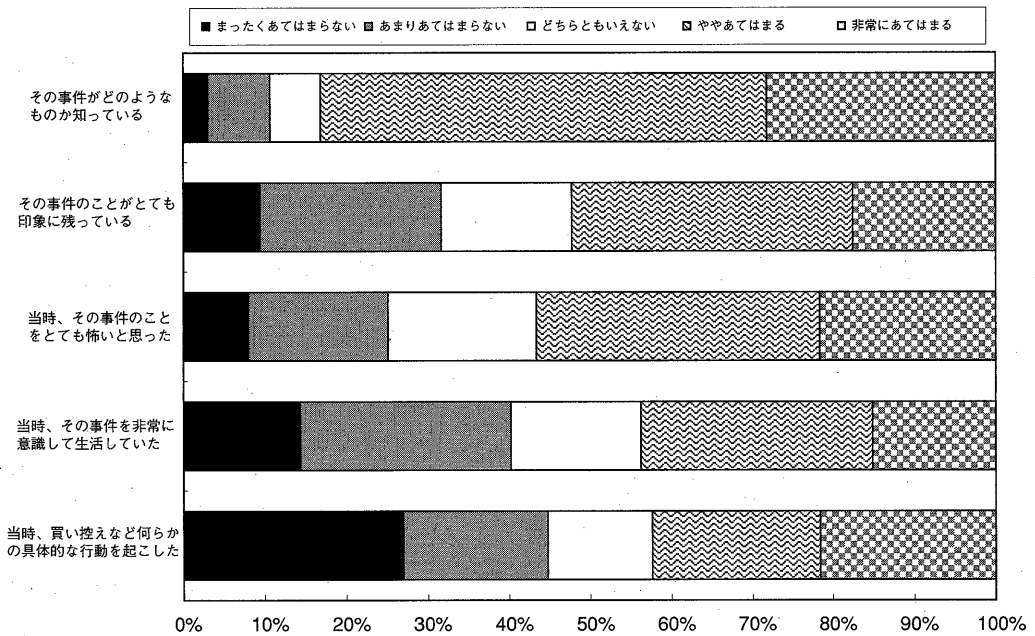


Fig. 2 雪印事件に関するリスク態度 (n=468)

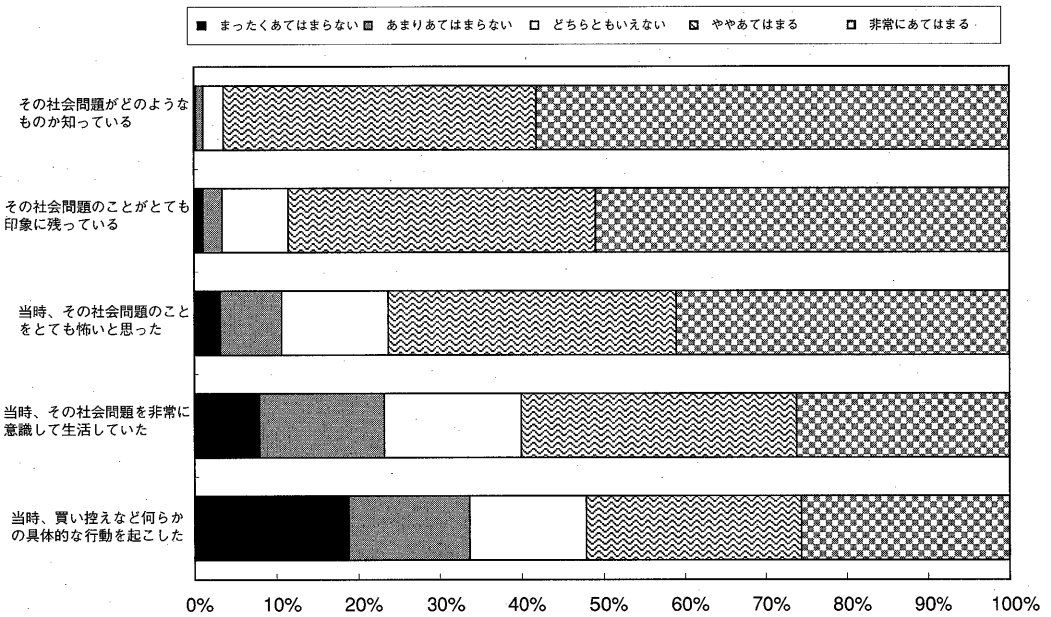


Fig. 3 BSE問題に関するリスク態度 (n=468)

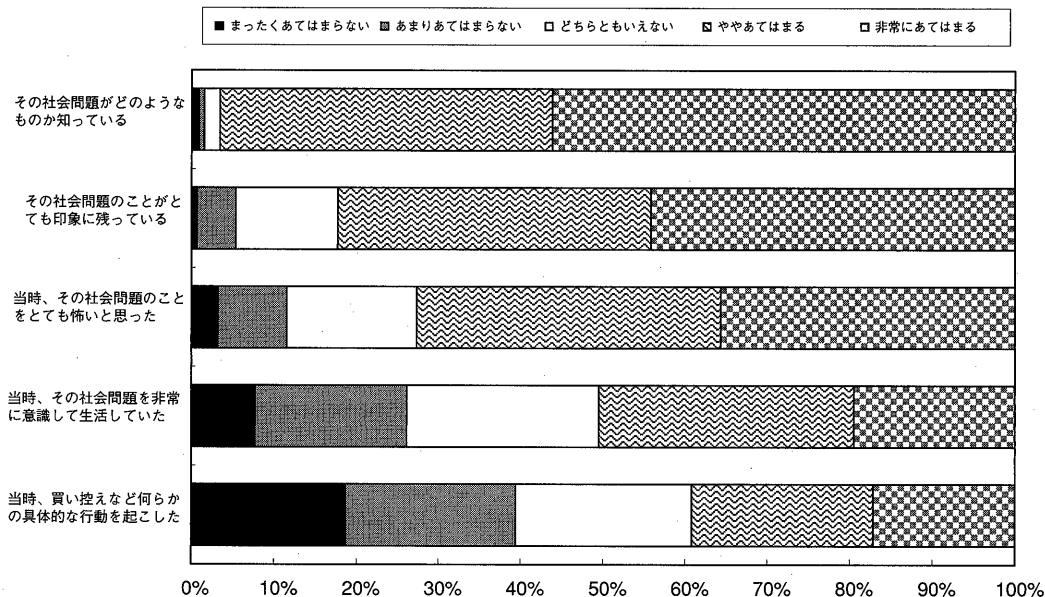


Fig. 4 鳥インフルエンザに関するリスク態度 (n=468)

はまらない」と答えた者は、0.9%から19%となっている。

これらの結果には2つの解釈が可能である。ひとつは、調査時点で当時の事件・事故に対する記憶が曖昧になっている可能性が考えられる。事件・事故発生当時は、リスク態度が高まっていたにもかかわらず、時間経過とともに忘れ去られている可能性である。もうひとつは、近年、人々の食品安全への関心が高まったことの影響が考えられる。神里(2004)は、BSE問題を契機に特に2002年以降、食品関連の事件・事故・問題に関する新聞記事数が増加傾向にあることを示している。報道の増加が食品に対する危機意識を高め、それが買い控えなどの行動にも影響を及ぼしているとも考えられる。また、これら2つの要因の相互作用による影響も考えられる。

4つの事件・事故に関するリスク態度の項目間相関をTable 1に示した。これらの結果から、BSE問題と鳥インフルエンザは全般的に強い正の相関関係にあることが示された。これは、2つの問題は発生時期が近接しており、実際には問題の性質が異なるにもかかわらず、両者とも食肉に関連すると捉えられたためではなかと考えられる。また、「(その問題を)とても怖いと思った」、「(その問題を)非常に意識して生活していた」という感情的な側面が、買い控えなどの行動と強い正の相関関係にあることが示された。このことから、感情的な要素やそれに基づいた継続的な注意(意識)が購買行動に影響を与える可能性が示唆された。

つぎに、リスク態度が、日頃の食との関わり方によって異なる可能性が考えられるため、大学生と大学生の母親におけるリスク態度の相違について検討した。調査対象となった大学生の中には社会人学生も含まれている可能性があり、年齢に若干のばらつき認められたため、本研究では便宜上18歳から23歳までを大学生群とした。回答に欠損のない大学生320名、大学生の母親131名を分析対象とした。

4つの事件・事故に関するリスク態度を、それぞれ大学生と大学生の母親別にFig.5からFig.8に示した。すべての項目において、0.1%水準で有意差が認められ、大学生よりもその母親の方

Table 1 事件・事故に関するリスク態度間の相関係数 (r) (n=468)

	JCO事故					雪印事件					BSE問題					鳥インフルエンザ				
	知識	印象	感情	意識	行動	知識	印象	感情	意識	行動	知識	印象	感情	意識	行動	知識	印象	感情	意識	行動
JCO事故																				
その事故がどのようなものか知っている	1																			
その事故のことがとても印象に残っている	0.93	1																		
当時、その事故のことをとても怖いと思った	0.91	0.91	1																	
当時、その事故を非常に意識して生活していた	0.78	0.80	0.79	1																
当時、買い控えなど何らかの具体的な行動を起こした	0.64	0.65	0.64	0.84	1															
雪印事件																				
その事故がどのようなものか知っている	0.29	0.27	0.27	0.23	0.20	1														
その事故のことがとても印象に残っている	0.27	0.30	0.27	0.26	0.23	0.61	1													
当時、その事故のことをとても怖いと思った	0.24	0.25	0.26	0.25	0.26	0.50	0.54	1												
当時、その事故を非常に意識して生活していた	0.26	0.28	0.28	0.32	0.36	0.49	0.54	0.69	1											
当時、買い控えなど何らかの具体的な行動を起こした	0.20	0.24	0.22	0.26	0.30	0.39	0.44	0.56	0.73	1										
BSE問題																				
その事故がどのようなものか知っている	0.14	0.12	0.13	0.11	0.09	0.41	0.22	0.21	0.21	0.15	1									
その事故のことがとても印象に残っている	0.14	0.14	0.16	0.13	0.12	0.29	0.40	0.32	0.32	0.27	0.58	1								
当時、その事故のことをとても怖いと思った	0.14	0.18	0.21	0.19	0.19	0.29	0.33	0.48	0.46	0.38	0.35	0.52	1							
当時、その事故を非常に意識して生活していた	0.22	0.25	0.25	0.29	0.29	0.28	0.35	0.48	0.55	0.50	0.26	0.45	0.71	1						
当時、買い控えなど何らかの具体的な行動を起こした	0.26	0.29	0.28	0.31	0.34	0.25	0.34	0.42	0.50	0.61	0.17	0.33	0.55	0.76	1					
鳥インフルエンザ																				
その事故がどのようなものか知っている	0.12	0.08	0.11	0.06	0.04	0.36	0.22	0.21	0.17	0.12	0.68	0.47	0.29	0.22	0.14	1				
その事故のことがとても印象に残っている	0.15	0.17	0.18	0.14	0.14	0.29	0.38	0.31	0.25	0.20	0.42	0.57	0.41	0.36	0.26	0.59	1			
当時、その事故のことをとても怖いと思った	0.18	0.20	0.22	0.22	0.21	0.29	0.29	0.46	0.38	0.29	0.35	0.45	0.68	0.57	0.46	0.41	0.60	1		
当時、その事故を非常に意識して生活していた	0.21	0.23	0.25	0.29	0.28	0.24	0.29	0.44	0.48	0.40	0.22	0.34	0.56	0.66	0.59	0.28	0.47	0.67	1	
当時、買い控えなど何らかの具体的な行動を起こした	0.21	0.24	0.23	0.32	0.35	0.22	0.28	0.41	0.47	0.52	0.15	0.25	0.49	0.61	0.71	0.20	0.35	0.50	0.73	1

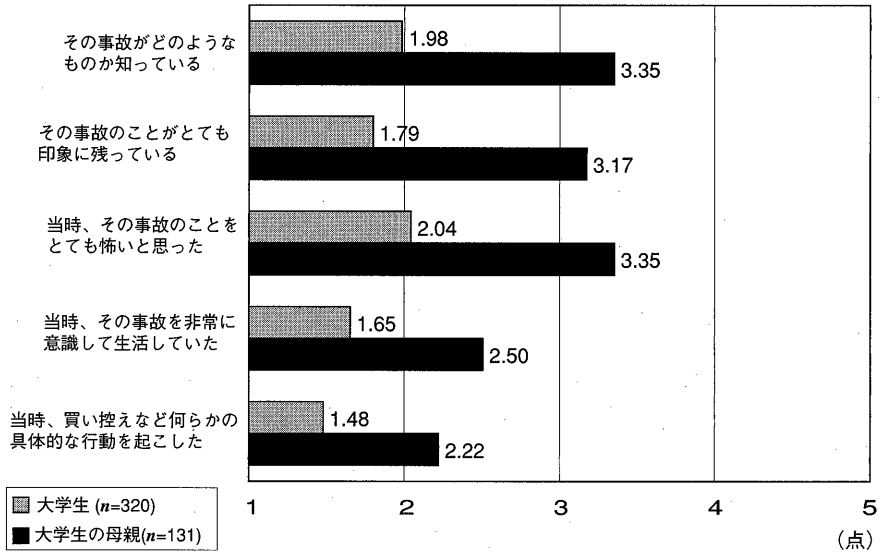


Fig.5 大学生と母親のJCO事故に対するリスク態度

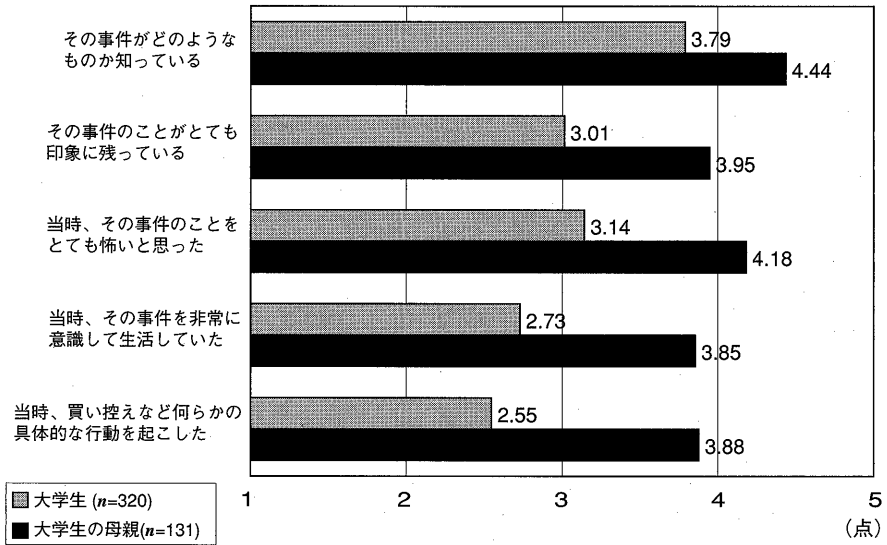


Fig.6 大学生と母親の雪印事件に対するリスク態度

が、得点が高い傾向が認められた。大学生はJCO事故に関して得点が非常に低い傾向があったが、これは事故当時まだ中学生や高校生だったために、社会問題に対する関心が高くなかったためとも考えられる。

4.2 食品購買行動と食品リスク態度

大学生と大学生の母親の食品購買行動尺度と食品リスク態度尺度の項目得点を比較した結果を、Fig.9とFig.10に示す。食品購買行動については、大学生よりも母親は、「賞味期限を念入りに調

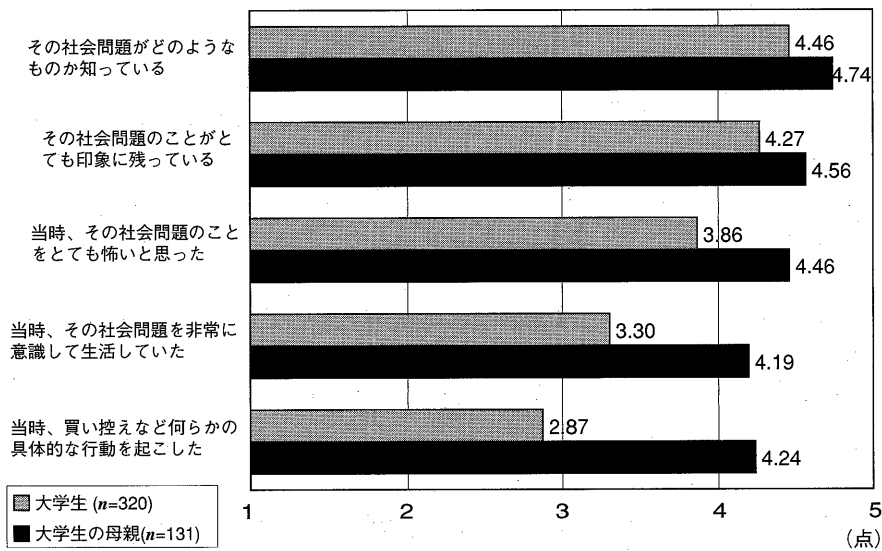


Fig.7 大学生と母親のBSE問題に対するリスク態度

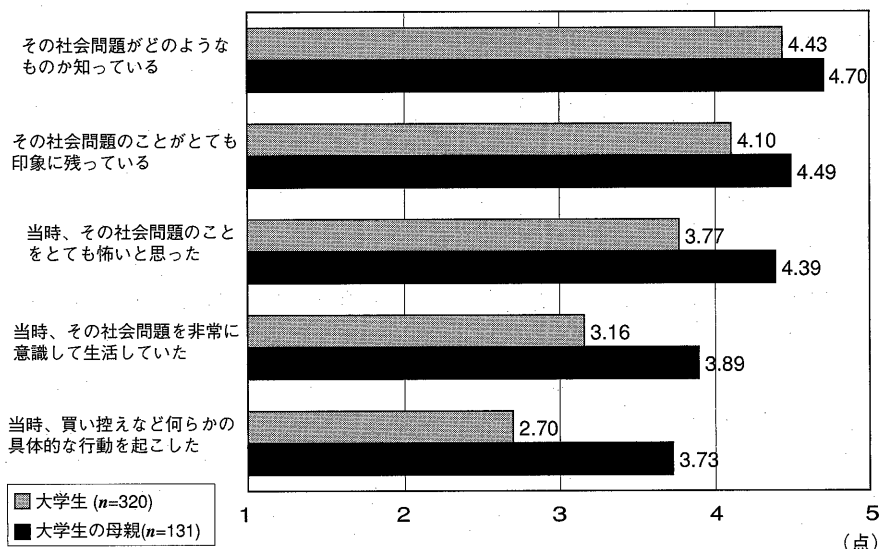


Fig.8 大学生と母親の鳥インフルエンザに対するリスク態度

べてから買う」、「少しぐらい価格が高くて、有機野菜や無農薬野菜を買う」、「加工食品はなるべく買わないようにしている」など、食品に対するリスク回避傾向が強く、逆にインスタント食品や新製品については、大学生の方が購買するケースが多いことが示唆された。食品リスク態度については、大学生よりもその母親の方が食品リスクに関心が高いことが示された。

食品購買行動尺度について探索的因子分析を行った。その結果をTable 2に示した。因子分析は主因子法を用いた。因子の解釈可能性と初期固有値の減衰から因子数を4と決定した。回転については、斜交回転、直交回転とも大きな差が認められなかったため、直交回転（バリマックス

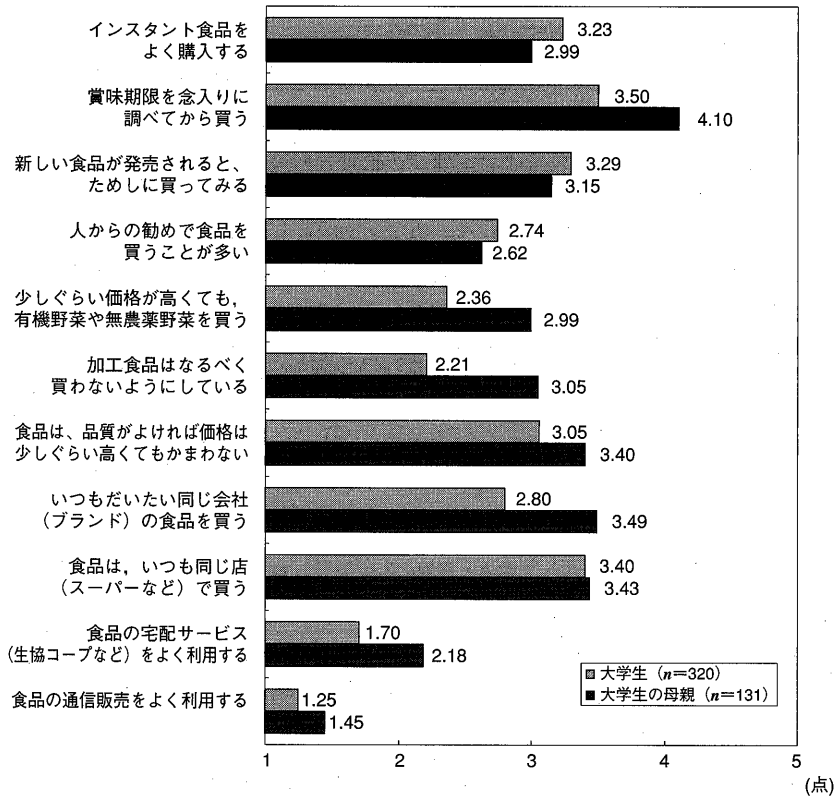


Fig.9 大学生と母親の食品購買行動尺度における項目得点の比較

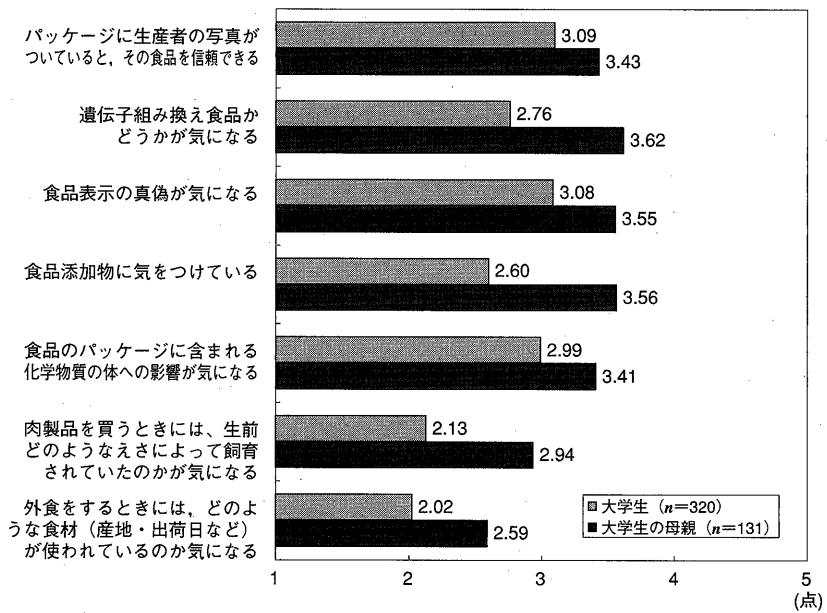


Fig.10 大学生と母親の食品リスク態度尺度における項目得点の比較

回転)を採用した。第3因子と第4因子は項目数が2項目と少ない傾向にあったが、探索的に傾向を探る目的で因子として採用した。

因子負荷量を考慮して、第1因子を「安全志向」、第2因子を「保守志向」、第3因子を「新奇志向」、第4因子を「宅配志向」と命名した。

同様に、食品リスク態度についても探索的に因子分析を行ったところ、1因子構造が妥当であると判断されたため、主成分分析を行った。その結果をTable 3に示した。

食品購買行動尺度の因子得点と食品リスク態度尺度の主成分得点をもとに、事件・事故に関する

Table 2 食品購買行動尺度の因子分析結果 (主因子法・バリマックス回転) (n=458)

	安全志向	保守志向	新奇志向	宅配志向	h ²
加工食品はなるべく買わないようにしている	<u>0.69</u>	0.15	-0.12		0.52
少しぐらい価格が高くて、有機野菜や無農薬野菜を買う	<u>0.67</u>	0.14	0.14	0.28	0.56
食品は、品質がよければ価格は少しぐらい高くてもかまわない	<u>0.47</u>		0.19	0.23	0.32
インスタント食品をよく購入する	<u>-0.36</u>		<u>0.34</u>		0.25
いつもだいたい同じ会社(ブランド)の食品を買う	0.22	<u>0.67</u>			0.51
食品は、いつも同じ店(スーパーなど)で買う		<u>0.63</u>			0.41
賞味期限を念入りに調べてから買う	0.29	<u>0.31</u>			0.22
新しい食品が発売されると、ためしに買ってみる			<u>0.61</u>		0.38
人からの勧めで食品を買うことが多い			<u>0.58</u>		0.34
食品の宅配サービス(生協コープなど)をよく利用する	0.11			<u>0.61</u>	0.38
食品の通信販売をよく利用する	0.11			<u>0.61</u>	0.39
固有値	1.44	1.02	0.93	0.91	4.29
分散(%)	13.08	9.23	8.47	8.23	39.00

因子負荷量が、.10以上の値を示したもののみ記し、.30以上のものに下線を記した。

Table 3 食品リスク態度尺度の主成分分析結果 (n=460)

	第1主成分
肉製品を買うときには、生前どのようなえさによって飼育されていたのかが気になる	0.81
食品添加物に気をつけている	0.79
食品のパッケージに含まれる化学物質の体への影響が気になる	0.77
遺伝子組み換え食品かどうか気になる	0.77
外食をするときには、どのような食材(産地・出荷日など)が使われているのかが気になる	0.76
食品表示の真偽が気になる	0.74
パッケージに生産者の写真がついていると、その食品を信頼できる	0.36
固有値	3.73
分散(%)	53.26
α係数	0.85

るリスク態度との関連について検討した。その結果をTable 4に示す。4つの事件・事故に対する感情・意識・行動に関して、食品購買行動尺度の「安全志向」因子との関連と食品リスク態度との関連が強い傾向が認められた。また、同様に、食品購買行動尺度の「保守志向」因子との関連が認められた項目もあったが、「新奇志向」因子や「宅配志向」因子との関連は認められなかつ

Table 4 事件・事故に関するリスク態度と食品購買行動尺度（因子得点）および食品リスク態度（主成分得点）の相関（ r ）
($n=460$)

	食品購買行動				食品リスク態度
	安全志向	保守志向	新奇志向	宅配志向	
JCO事故					
その事故がどのようなものか知っている	<u>0.26</u>	0.11	-0.06	0.09	<u>0.29</u>
その事故のことがとても印象に残っている	<u>0.26</u>	0.12	-0.02	0.08	<u>0.31</u>
当時、その事故のことをとても怖いと思った	<u>0.26</u>	0.13	-0.04	0.07	<u>0.29</u>
当時、その事故を非常に意識して生活していた	<u>0.31</u>	0.11	0.07	0.12	<u>0.37</u>
当時、買い控えなど何らかの具体的な行動を起こした	<u>0.27</u>	0.16	0.05	0.12	<u>0.33</u>
雪印事件					
その事故がどのようなものか知っている	0.18	0.12	-0.04	-0.02	<u>0.26</u>
その事故のことがとても印象に残っている	<u>0.20</u>	0.17	-0.06	0.06	<u>0.35</u>
当時、その事故のことをとても怖いと思った	<u>0.26</u>	0.17	0.01	0.09	<u>0.46</u>
当時、その事故を非常に意識して生活していた	<u>0.32</u>	<u>0.20</u>	0.05	0.10	<u>0.47</u>
当時、買い控えなど何らかの具体的な行動を起こした	<u>0.32</u>	<u>0.24</u>	0.03	0.11	<u>0.46</u>
BSE問題					
その事故がどのようなものか知っている	0.19	0.02	0.03	-0.05	0.18
その事故のことがとても印象に残っている	0.17	0.09	0.01	0.02	<u>0.28</u>
当時、その事故のことをとても怖いと思った	<u>0.31</u>	<u>0.25</u>	0.03	0.04	<u>0.42</u>
当時、その事故を非常に意識して生活していた	<u>0.36</u>	<u>0.21</u>	0.05	0.02	<u>0.43</u>
当時、買い控えなど何らかの具体的な行動を起こした	<u>0.43</u>	<u>0.26</u>	0.03	0.12	<u>0.47</u>
鳥インフルエンザ					
その事故がどのようなものか知っている	0.13	0.11	-0.04	-0.08	0.12
その事故のことがとても印象に残っている	0.15	0.13	0.02	-0.04	<u>0.26</u>
当時、その事故のことをとても怖いと思った	<u>0.22</u>	<u>0.21</u>	0.02	-0.03	<u>0.34</u>
当時、その事故を非常に意識して生活していた	<u>0.29</u>	<u>0.24</u>	0.13	0.01	<u>0.43</u>
当時、買い控えなど何らかの具体的な行動を起こした	<u>0.35</u>	<u>0.26</u>	0.11	0.08	<u>0.45</u>

相関係数の絶対値が、.20以上のものに下線を記した。

た。したがって、本研究で取り上げた4つの事件・事故に対するリスク態度の感情・意識・行動の側面は、食品に対するリスク態度や安全志向の食品購買行動と関連が強いことが明らかになった。

つぎに、食品購買行動尺度の因子得点と食品リスク態度の主成分得点をもとに、大学生と大学生の母親の得点比較を行った。食品購買行動については、「安全志向」、「保守志向」、「宅配志向」

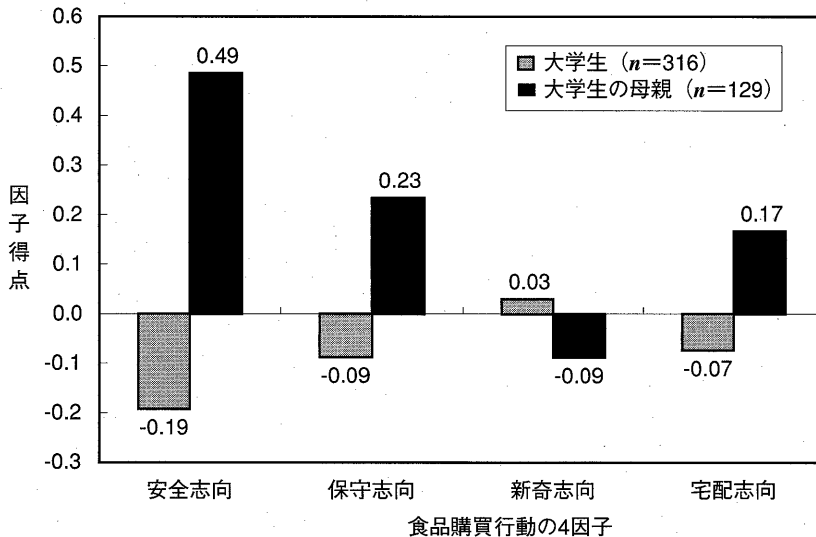


Fig. 11 大学生と母親の食品購買行動尺度における因子得点の比較

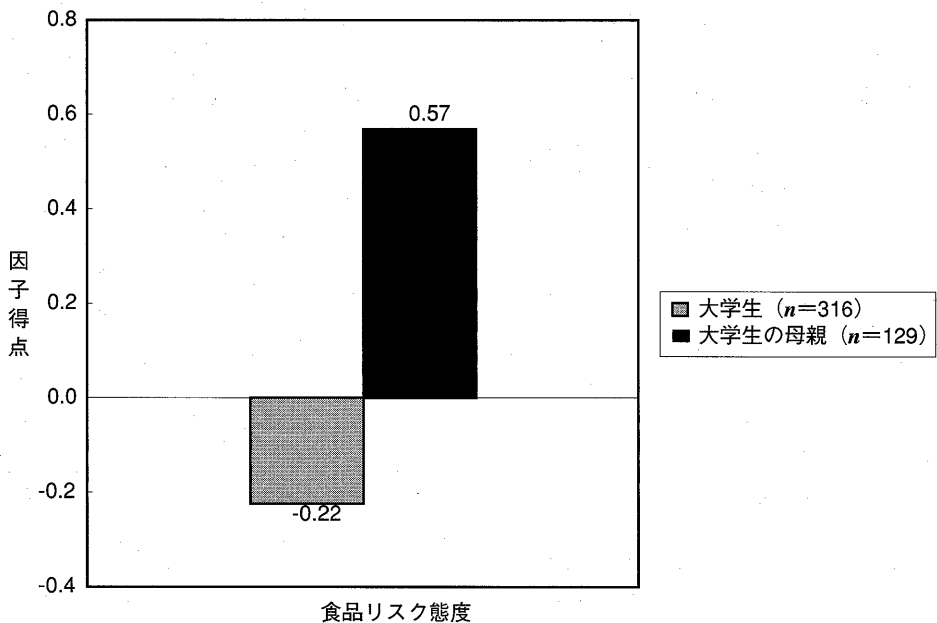


Fig. 12 大学生と母親の食品リスク態度尺度における因子得点の比較

において大学生よりも大学生の母親の因子得点が高い傾向にあり、「新奇志向」についてはそれが逆転していた。食品リスク態度については、大学生よりもその母親の方が高い傾向が認められた。これらのことから、大学生よりも大学生の母親の方が、食品リスクに対する態度、行動とも安全志向であることが示された。

4.3 場面想定下における食品の価格評価

場面想定法を用いて、大学生と大学生の母親におけるリスク状況下での食品価格評価を比較した。

Table 5には、アメリカ産牛肉がBSEに汚染されている可能性があるとの報道がなされているときに、報道以降には12種類の国産およびアメリカ産やオーストラリア産の牛肉や豚肉の値段がいくらなら購入するか、その平均価格評価値を大学生および大学生の母親別に示した。購買金額は、全体的に設定した金額よりも低い評価となったが、外国産の牛肉については、大学生よりも大学生の母親の方がより低い価格評価を行う傾向が認められた。場面想定では、アメリカ産の牛肉を用いたにも関わらず、オーストラリア産の牛肉についても価格評価の低下が認められた。また、輸入の豚肉に対しても価格低下が認められた。これは、輸入肉というカテゴリーで判断を行っている可能性を示唆している。

Table 5 BSE場面想定下における大学生と母親の平均価格評価値の比較 (単位：円)

アメリカ産牛肉がBSEに汚染されている可能性があるとの報道がなされています。あなたは、報道以降には以下の食品の値段がいくらなら買いますか。

食 品	設定価格 (円)	大学生 (n=315)	大学生の母親 (n=129)	t検定結果
国産高級和牛牛肉 (バラ) 100g	560	485.52	465.40	n.s.
国産牛肉 (バラ) 100g	370	316.59	313.90	n.s.
オーストラリア産牛肉 (バラ) 100g	210	162.85	127.49	**
アメリカ産牛肉 (バラ) 100g	290	102.18	46.06	**
国産豚肉 (ロース) 100g	230	217.17	226.08	n.s.
輸入豚肉 (ロース) 100g	170	109.04	81.48	**
国産牛肉使用ハンバーガー	120	110.31	101.25	†
オーストラリア産牛肉使用ハンバーガー	120	92.56	65.23	**
アメリカ産牛肉使用ハンバーガー	120	47.06	22.40	**
国産牛肉使用 焼肉 (上カルビ・タレ)	600	532.57	500.70	n.s.
国産牛肉使用 焼肉 (牛ホルモン・タレ)	500	420.76	338.05	**
国産豚肉使用 焼肉 (豚タン・塩)	400	353.17	327.66	†

** 1%水準で有意差あり

† 10%水準で有意傾向

n.s. 有意差なし

Table 6 鳥インフルエンザ場面想定下における大学生と母親の平均価格評定値の比較（単位：円）

タイで鳥インフルエンザが発生したとの報道がなされています。あなたは、報道以降には以下の食品の値段がいくらなら買いますか。

食 品	設定価格 (円)	大学生 (n=315)	大学生の母親 (n=129)	t検定結果
国産鶏肉（もも）200g	240	212.58	206.40	n.s.
タイ国鶏肉（もも）200g	170	55.94	24.44	**
ブラジル産鶏肉（もも）200g	170	110.48	60.71	**

** 1%水準で有意差あり

n.s. 有意差なし

Table 6には、タイで鳥インフルエンザが発生したとの報道がなされているときに、報道以降には3種類の国産および食品の値段がいくらなら購入するか、その平均価格評定値を大学生および大学生の母親別に示した。鳥インフルエンザ発生当時、鳥インフルエンザはBSEとは異なり、罹患した鶏肉を食べても人間が感染することはないとの報道が盛んになされていたにもかかわらず、タイ産の鶏肉の価格評定は大きく低下していた。また、ブラジル産の鶏肉の価格も低下傾向が認められた。これら外国産の鶏肉については、牛肉と同様に、大学生よりも大学生の母親の方がより低い価格評定を行う傾向が認められた。

これらの結果から、第一に、大学生よりも大学生の母親の方が、リスクのある食品により強い抵抗感を示す傾向が認められた。このことは食品リスク態度の高い者の方がより顕著な行動をとりやすい可能性を示唆するだろう。第二に、食品リスクは、地域限定的なリスクであっても、外国産かそうでないかという、より大きなカテゴリーで捉えられる可能性が示唆された。

5. まとめ

本研究の結果から、大学生に比べて大学生の母親の方が、事件・事故に対するリスク態度、食品に対するリスク態度、食品購買行動の「安全志向」が強い傾向が明らかになった。食品の安全性に対して不安や恐怖を適度に感じることは、自分や家族の健康を守ることに繋がると考えられる。しかし、報道によって情報過多になり不安や恐怖ばかり先行すると、思考停止状態に陥り、デマや風評に惑わされる危険性も考えられる。価格評定の結果から、大学生の母親の方が、たとえば、アメリカ産の牛肉に対するBSEが問題になったという状況下でオーストラリア産の牛肉の価格が低下するなどの傾向が顕著に認められた。これは、大学生よりも食品リスクに対する関心の高い母親の方が、リスクをより大きなカテゴリーで捉えがちであることを示している。リスク範囲を拡大して捉えることは、未知の未然にリスクを回避できるという効用がある。しかし同時に、享受できるはずの利益をも排除してしまう可能性を含んでいる。行き過ぎたリスク態度は、風評による被害を助長する原因の一つとなると考えられる。

引用文献

堀 洋元（2003）メディアは事故をどのように報道したか 岡本浩一・今野裕之（編著）リスク・マネ

ジメントの心理学—事故・事件から学ぶ pp.67-90. 新曜社
神里達博 (2004) 近年の食品問題の構造—「2002年食品パニック」の分析 社会技術研究論文集 vol.2,
331-342.
岡本浩一 (1992) リスク心理学入門 サイエンス社

謝辞

調査にあたって、文教大学人間科学部人間科学科心理学コースの倉持広枝さん、白土貴紀さん、石原理恵さん、畑千恵さん、磯昭弘さんに、調査票の作成やデータ整理のご協力をいただいた。ここに敬礼申し上げる。

本研究は、文教大学平成16年度共同研究費の支援を受けて行われた。